

Colloque internationale « La didactique des langues face aux cultures linguistiques et éducatives »報告

西山教行

Université Paris III - Sorbonne nouvelle (UFR Didactique du Français Langue Etrangère)では2002年12月12日から14日まで《La didactique des langues face aux cultures linguistiques et éducatives》と題する国際学会を開催し、ヨーロッパを中心として19カ国より120名あまりの研究者が参加し、70の研究発表が行われた。

この国際学会は、パリ第3大学のFLE教育研究組織が初めて開催するもので、その目的は、文脈、状況、伝統、習慣といった狭義の言語教育学においては周縁に位置づけられるものと言語教育学との関連を考究し、言語学習・教育という経験的あるいは実践的知としての言語教育学と言語学や教育学に隣接する理論的知としての言語教育学の境界やその関連領域を解明することにある。このような観点から、研究発表は「教育文化と言語教育」、「言語活動の文化（学的知識と一般的知識）」、「教育学の文化（方法論、言語教育・学習実践）」という3つのテーマに分類された。

この類型化が示すように、この会議の目的は、教室内での授業活動やクラス運営を巡る具体的かつ実践的な教授法の考察だけではなく、教授法や教育・学習を巡るディスカールを対象とする討議や考究にある。言い換えるならば、参加者の問題意識は、「どのように教えるか」、「なぜ教えるか」に関わる以上に、このような教育的言説に対する批判的考察に向けられていると総括できる。

日本人の発表は3件あり、本学会からは石川文也(横浜市立大学)が《Approche interactive dans la transmission de faits grammaticaux : le cas de l'enseignement du français aux apprenants japonais généralement connus pour leur discrétion en classe de langue》と題する発表を、筆者が《L'enseignement du français aux indigènes à la croisée des cultures politiques sous la IIIe République : comment la mutation de la politique coloniale s'est articulée avec la politique linguistique ?》と題する研究報告を行った。筆者の参加した分科会は「教育文化と言語教育」のなかでも歴史的展望に関わるもので、筆者のほかには、第3共和政下のフランスでのフランス語普及・教育において直接教授法がどのように統合されたか(PUREN)、第3共和政初期の古典教育に古フランス語学習・教育がどのように導入されたか(SAVATOVSKY)、ブラジルにおけるフランス語教育学の形成(SCHERER)を巡る研究が行われた。

研究発表の豊かさや質の高さ、また参加者の国際性(ドイツ、ベルギー、イギリス、ルーマニア、スウェーデン、クロアチア、ポーランド、ロシア、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、トーゴ、イスラエル、アルゼンチン、ブラジル、台湾、韓国、カナダ)に照らし合わせても、フランス語教育学が学問として成熟しつつあることを十分にうかがわせ、その学問的射程がフランスの国境を越えつつあることを実感させた。

(新潟大学)